

下記の文書によれば、「**トランプ現象**」から見えるものは、

①先進国が主導してきた**新自由主義、グローバル資本主義**という**格差を拡大する枠組み**を大前提とする**現状からの変化**を人々は切実に求めていること。

②**格差解消のための社会主義的な考え**を持ち込もうとするサンダース氏のような人が再び出てくること。トランプ氏はその前の**通過点**のような存在、一種の壊し屋という役割であること。

③かかる変化を人々が求める中で、**既成政治家を排除する下からの圧力（革命）**が高まる可能性が否定できないこと。  
である。

記

<特集ワイド>この国はどこへ行こうとしているのか トランプという嵐  
**資本主義の先、見据えよ**

社会学者・大澤真幸さん

毎日新聞 2016年11月17日

(文中の太字は引用者による)

ドナルド・トランプ氏（70）が米国の次期大統領に選ばれた時、大澤真幸さんはオウム真理教の信者たちにインタビューした1995年を思い出していた。長野県にある実家は、前年に起きた松本サリン事件の現場から約100メートル離れた場所にあった。両親は、サリンの影響で軽度ながら体調不良に陥った。

そのような経験もあって、事件後は教団を研究対象とし、自分と同世代の人々が松本智津夫（麻原彰晃）元教団代表の妄想を信じていった過程をたどろうとした。

「教養があって頭もいい。僕が好きなタイプの人たちが、教祖のとんでもない予言にはまっていった。その時に感じた人間の心理が、『隠れトランプ派』と呼ばれる支持層と重なって見えたんです」

オウム信者と隠れトランプ派は、どうつながるのか。

「信者の中には『尊師は、世界が破滅する、もう一つの国家を造るとか夢みたいなのを言ってるんですよ』などと、妄想に過ぎないと分かっている人が結構いたんです。『ナンチャッテ感覚』と言ったらいいのか、虚構と分かっているのに上層部に言われるままテロに手を染めてしまった。そんな信者の心理が、『俺はトランプみたいに愚かじゃない』『差別発言をよく平気で言えるな』と口ではばかにしながら支持している『隠れトランプ派』と共通しているように見えるのです」

笑いや冗談の対象にしている「大物」をいつのまにか信じ始める。この不思議な現象を大澤さんは「**アイロニカル（皮肉的）な没入**」という社会学用語で説明した。**冗談と本気の区別があいまいなまま、どっぷりはまっていく現象**だ。

「アイロニカルな没入」は私たちの日常生活にも見られる。「テレビCMの半分はふざけた内容ですよ。ナンチャッテという感覚で企業は宣伝しているわけです。消費者の方も宣伝のそうしたノリ、つまり自分で自分を笑うようなノリを承知しているのに、商品を買ってしまう。こうしたふざけた気分を自覚しながら、それに踊らされて消費するのが現代社会です」

社会学者の驚きは、「アイロニカルな没入」と似た現象が、世界で最も重要な国の最も重要な選挙で起きたことだった。「人類の将来を決めるような米大統領選に表れた。これは大変なことです。そして、今回の結果で重要なのは『普通に考えたら……』という言い方が通用しなくなったということなのです」

米国社会には「**ポリティカル・コレクトネス（PC）**」という言葉が浸透している。人は皆、平等であり、人種、性別、出自を巡る差別的な言葉はご法度という常識だ。「ところがトランプ氏はこれを完全に無視している。『PCは正しい、でもなんか偽善的な感じがして嫌なんだよなあ』と思っている人にとって、彼の暴言は一種のカタルシス（心の浄化）になる。品行方正な人の発言なら問題になるけど、人間としての資質を問われるようなトランプ氏が言えば、人々は『とんでもない』と笑いながらも、無意識のレベルでひかれていく。『普通に考えたら』という声は無視し、ひんしゅくを買うことを恐れない人だと思いはじめます」

こうした人を受け入れる根っこには、多くの人々が「普通でないこと」を求めている現実があると、大澤さんは考えている。「**トランプ支持の背後には、国民の間で格差を広げる今の経済システムに対する不満がある。**あらゆる不平等の中で資本主義がもたらす不平等が最もきつい。仕事がない、所得が伸びない。必要とされていない。割を食っていると思っている人たちにとって、トランプ氏は『**最悪の局面を乗り越え、何か普通ではないことをしてくれそうな人物**』に映るんです」

では、**日本はどうだろう。**同様の現象が起きていないだろうか。トランプ氏ほど極端ではないにしても、**過激な発言やとがった主張をする一部の政治家を、国民は「現状を変えてくれる」「実行力がある」といつのまにか評価して**いないだろうか（引用者注）。

引用者注：「**トランプ現象は、かつての橋下徹氏のブームとうり二つ**」<下記URLをクリックしてください>ご参照

<http://fileshelf.cocolog-nifty.com/blog/files/94.pdf>

「**橋本維新の台頭＝トランプ現象と同様の現象**」<下記URLをクリックしてください>ご参照

<http://fileshelf.cocolog-nifty.com/blog/files/96.pdf>

<私たちは、明らかに、**変化を、劇的な変化を求めている。どこへの変化ということについて明確なイメージをもつことはできずにいる。しかし、ここからの、現状からの変化を切実に求めている**>

これは大澤さんが9月に出した「**可能なる革命**」（太田出版）という本の書き出しだ。「**現状**」とは、**先進国が主導してきた新自由主義、グローバル資本主義という枠組みを大前提とする社会**を指す。

「今は米国、日本に限らず世界中の人々が、大転換を求める胎動の時代です。ちょっと前なら気恥ずかしかった『革命』という言葉が僕があえてタイトルにしたのは、そういう時代のムードもあります。資本主義という言葉、その『終わり』に触れる本や議論は以前はほとんどありませんでしたが、ここ数年、随分社会に浸透してきました」

**トランプ氏の台頭も、ある意味で革命と言えるのかもしれない。**多くの米国民が「彼ならば『**普通に考えたら**』できないことを成し遂げることができる」と信じたのだから。

「彼が成果を出すのは無理でしょう。彼の主張通り、自由貿易や移民を否定すれば経済はガタガタになり、早晚、支持率の大幅低下を招く。ただ、長い目で見れば『**トランプ選択**』は米国が通らなければならない道だったということになる。**次には、格差解消のための社会主義的な考えを持ち込もうとする、民主党（予備選）候補だったサンダース氏のような人が再び出てくる**と思います。トランプ氏はその前の通過点のような存在、一種の壊し屋という役割なのです」

トランプ時代がもたらすかもしれない、米国社会を根本から変えそうなりねりは、やがて日本に波及すると見ている。「**日本経済は、米国の資本主義に追いつき、追い越そうとしてきたことで、グローバル資本主義の恩恵を享受してきました。しかし、トランプ氏が選ばれたことで、このシステムに問題があるということが広く認知された。それを踏まえれば、ヒラリー・クリントン氏に代表されるような元の体制にもはや戻ることにはない。その体制に追隨してきたアベノミクスなどもいずれ死語になる**でしょう」

では、日本が混乱状態に陥った時、どのような道を進めばいいのか。「今は、トランプという人物像に着目し、日米関係の変化を心配する声が多いのですが、彼を押し上げた圧力の方に目を向けるべきだと思います。劇的な変化を求める圧力に、**何でも米国を追い掛ければいいという発想から抜け出し、トランプ氏の先を見据え、今の資本主義をどう変えていくのか、その代替物はあるのか。そんな議論が国内でもっと広がらなければならない**」

トランプ氏の勝因の一つは、現状の経済システムに対する米国民のうんざり感だ。高齢化で人口構成は違うものの、日本も閉塞へいそく感がまん延している。**既成政治家を排除する下からの圧力が高まる**可能性は否定できない。**その「革命」は、差別や格差のない社会の実現にどうつながっていくのか。** 【藤原章生】

おおさわ・まさち

1958年長野県生まれ。東京大大学院博士課程修了（社会学）。千葉大助教授、京都大教授などを歴任。戦後を理想、虚構、不可能性の3時代に分けて分析した。近著に「げんきな日本論」など。

<この文書は、「反新自由主義・反グローバリズムの反撃」（下記URLをクリック）に掲載されているものです。>

